新潟県立近代美術館だより

雪椿通信

NOM

❷

展覧会関連：
モーリス・ユトリロ――憂愁のパリを描いた風景画家…… P2

ポンペイ展　世界遺産　古代ローマ文明の奇跡…… P3

雪の織物　小千谷縮・越後上布…… P4

所蔵品紹介：平成21年度の新収蔵品…… P5

あしあと：普及活動報告…… P6

アートボランティア通信…… P7

イベント情報／ショップ&レストラン情報／万代島美術館情報…… P8

表紙作品解説…… P8

❶

34
2010.4

特集 「モーリス・ユトリロ ―― 憂愁のパリを描いた風景画家」

「パリの思い出にたった一つの物しか持ってはいけないとしたら、何を選びますか」
とフランシス・カルコに聞かれて、彼は答えている。
「私は漆喰の欠けらを一つ持っていくでしょう。子供のころ、集めて遊んだあの漆喰の一片を」
「そして、それだけですか?」
「もちろんです。その漆喰の欠けらに触ったり、眺めたりしていると、色々なことが思い出されることでしょう」
（J.P.クレスペル『ユトリロの生涯』美術公論社 1981年）

モーリス・ユトリロ（1883−1955）は、静寂な街角や、古びた教会を慈しむように繊細に描き出した芸術家です。パリを描いた情緒あふれる風景画によって、日本で最も愛されつづけているフランス人画家の一人だといってよいでしょう。

その魅力の秘密は、一つには風景の中に優しく視線を誘っていく奥行きの表現にあります。幾何学的な遠近法を用いた都会風景は、とかく冷たい印象を与えたり、急速に後退する三次元性を強調しがちなものですが、この作家の風景には、時間がゆっくり感じられるような穏やかな奥行きがあります。多点透視図法という、漸進的な奥まり方を表す手法がとられているからでしょう。詩人ボードレールが「古い都の街中（まちなか）の曲りくねった襞の中」と歌ったような、少し昔のパリの趣が漂っています。画中に人影がまばらなことも、奥ゆかしい印象をさらに強めています。

またもう一つの秘密は、特徴的な絵肌にあります。ユトリロは、絵具に漆喰や砂を混ぜて、建物の壁に染み込んだ汚れや独特の肌合いを表現する工夫を凝らしていました。単純な白ではなく、時間の蓄積や人間の営みを表す深みのある白が、重要な役割を果たしているのです。特に「白の時代」といわれる前期の作品は、繊細な色彩の調和によって高い評価を受けています。ユトリロ以前には、パリのありふれた街路をこんなにも懐かしく哀愁を帯びた空間として表した画家はいませんでした。ドガやロートレックの描いたモンマルトルが、刺激的な都会であったことに比べると非常に対照的です。

《バイアン通り、パリ》1915年頃　個人蔵
©Jean Fabris 2010　©ADAGP, Paris & SPDA, Tokyo, 2010

これほど静かな風景を描いたユトリロが、波乱に富んだ破滅型の人生を歩んだことは実に皮肉な運命といわざるを得ません。ユトリロは、ピュヴィス・ド・シャヴァンヌやルノワールの作品のモデルを務めた女性、スュザンヌ・ヴァラドン（1865−1938）の私生児として、モンマルトルに生まれました。母ヴァラドンはエリック・サティやロートレックなど数多くの芸術家との恋愛遍歴の噂があった奔放な人ですが、豊かな芸術的才能に恵まれ、自ら絵筆をとって女流画家としての道を切り開き、芸術史に名を残したことでも有名です。多忙な母親に顧みられなかったユトリロは、孤独な少年時代に飲酒を覚え、後にアルコール中毒の治療の一つとして絵画を始めたともいわれています。ヴァラドンから手ほどきを受けた訳ではなく、ほぼ独学で絵を学び、やがて誰も想像し得なかった静かな美しさをたたえたパリ風景を生み出すようになっていきます。

中学を退学した後、ユトリロは堅気の仕事に従事しても長続きせず、モンマルトルの酒場で飲んだくれては暴力沙汰を起こし、20歳の時に精神病院に強制収容されて以降、断酒の治療を受けることの繰り返しが多くなっていきます。ヴァラドンがユトリロの年若い友人アンドレ・ユッテルと結婚し、再び母を奪われたことも画家の心の傷を深くした一因だと考えられます。飲み代がわりに酒場に置いていたユトリロの絵に画商たちが注目し始め、第一次大戦後から高額で取引されるようになると、一家の稼ぎ頭としてユトリロは多作し、作風は大きく変化していきました。「色彩の時代」といわれる後半生の色鮮やかで伸びやかなタッチの風景画が描かれます。晩年には四六時中監視される生活の中で、巨匠ユトリロの地位が確立されていき、半ば伝説的な存在としてその数奇な一生を終えています。

同時代の20世紀前半のパリには、モディリアニやフジタ、パスキン、シャガール、ピカソらが頭角を現しており、キュビスムやシュルレアリスムなど革新的な様式がめまぐるしく誕生していた時代です。外国出身者の多いエコール・ド・パリ（パリ派）の中で、生粋のモンマルトルっ子であるユトリロは、一貫して写実的な手法で郷愁を誘うパリを描き続けた稀有な画家だったといえます。

《サン＝リュスティック通り、モンマルトル》
1948年頃　個人蔵　©Jean Fabris 2010

母スュザンヌ・ヴァラドンと7歳のユトリロ

闘病の影響や著しい作風の変化などで、フランス国内における評価が定まらず、パリでは没後50年以上個展が開かれていませんでしたが、近年になって積極的な再評価の動きが生まれています。今夏当館で開催される「モーリス・ユトリロ展」は、世界有数のコレクターの所蔵するユトリロ作品のうち、全作品が日本初公開の約90点の名品で構成されるものです。憂愁と優しさに満ちたユトリロのパリ風景を再発見する貴重な機会となることと思います。

（学芸課長代理　平石昌子）

「モーリス・ユトリロ展」

■会　期／2010年7月10日㈯～8月25日㈬　会期中無休
■開館時間／9:00－17:00　毎週金曜は18:30まで延長開館
※観覧券の販売は閉館30分前まで
■観覧料／
　前売り　一般800円　大学・高校生600円
　当　日　一般1,000（800）円　大学・高校生800（600）円
※中学生以下無料
※（　）内は有料20名以上の団体料金
※障がい者手帳をお持ちの方は無料（受付でご提示ください）

展覧会予告

ポンペイ展 世界遺産 古代ローマ文明の奇跡

2010年9月11日（土）～11月23日（火・祝）

このところ日本各地では、古代ローマ美術にスポットを当てた展覧会が目白押しです。昨年の6月からは「チュニジア世界遺産　古代カルタゴとローマ展　きらめく地中海文明の至宝」展が仙台を皮切りにして金沢、東京、岡山、京都、浜松、宮崎、名古屋と巡回していますし、9月からも「古代ローマ帝国の遺産　栄光の都ローマと悲劇の街ポンペイ」と題した展覧会が東京、名古屋、青森、札幌と巡回中です。そしてさらにもう一つ、「ポンペイ展　世界遺産　古代ローマ文明の奇跡」展が今年の1月から福岡で始まり、横浜、名古屋会場を経て9月からは当館で開催され、その後さらに仙台に巡回します。

新潟では初の開催となる今回のポンペイ展では、ナポリ国立考古学博物館の全面的な協力のもと、ポンペイからの出土品を中心に、日本初公開を含む壁画、彫刻、工芸品、日用品など約250点を紹介します。色鮮やかなフレスコ画をはじめとして、イタリア国外へは初出品となる約60点の銀食器群、ポンペイの郊外にある別荘から出土した浴槽および給湯システム、その床面を飾っていたモザイク画の展示は、本展の見所のひとつです。

ポンペイ壁画を扱った展覧会は日本ではこれまでも何度か開催されています。しかしそれらはいずれも壁画のみを抜き出し、あくまでも美術史の枠内での紹介にとどまっていました。しかし今回の展覧会では、壁画のみならず、その壁画で飾られていた室内空間を出土品によって再現することにより、古代ローマ時代の人々が生活の中でどのようにして壁画を楽しんでいたのかを知ることができるはずです。社会の中での文化や芸術のあり方を改めて考える機会にもなるでしょう。

《アキレスとキローン》
フレスコ
125.0×127.0㎝
後1世紀半ば
ナポリ国立考古学博物館蔵
©Luciano Pedicini / Archivio dell' Arte

（主任学芸員 高晟埈）

特集

雪の織物　小千谷縮・越後上布

豊かな自然の恩恵を受け培われてきた雪の織物　重要無形文化財「小千谷縮・越後上布」は、2009年9月文化遺産保護条約に関する第4回政府間委員会において、「人類の無形文化遺産の代表的な一覧表」に関する審議結果として記載され、ユネスコ無形文化遺産に登録されました。日本の工芸品として第1号の登録です。「小千谷縮・越後上布」は、1955（昭和30）年に染織として国の重要無形文化財第1号に指定され、それから50年余の歳月を経て、後世に残すべき人類の無形遺産として世界に認められました。登録は、「小千谷縮・越後上布」が、雪上の雪さらしなど雪国文化の特質を有するとともに、原料から加工技術全般にわたり純粋の古法を伝えていることの貴重性が評価されました。本展は、それを記念し「小千谷縮・越後上布」の伝承における歴史的・文化的価値とユネスコ無形文化遺産登録を広く知らしめることを目的として開催します。

雪晒地　青藍女郎花秋草　大模様絣帷子

伝統的な越後織物の技術に与えられた名誉は、織物に携わる者として至福の喜びであります。そして、雪の生活に苦しみ嘆くだけでなく、類い稀なる雪の産物を創り出した先人たちの気骨と忍耐を心から誇りに思い、今日まで伝承に携わった方々へ心から敬意を称したいと思います。

重要無形文化財「小千谷縮・越後上布」は、5つの指定要件を満たさなければなりません。1、すべて苧麻（ちょま）を手うみした糸を使用すること。2、絣模様をつける場合は手くびりによること。3、いざり機（地機）で織ること。4、しぼとりをする場合は、湯のみ、足踏みによること。5、さらしは、雪晒しによること。代表的な工程の他に、70以上の濃密な手作業を繰り返し、技術を駆使して織物が完成します。

越後の麻織物の歴史は1200年前に遡ると言われ、奈良の正倉院には庸布として朝廷へ納められた麻布があります。古から、魚沼地方は越後上布と小千谷縮の原料となる苧麻の栽培が行われていました。戦国武将上杉謙信の時代には、無敵の上杉軍を支える資金源でありました。その後、上杉家は越後から福島会津、米沢へと苧麻の栽培と織物技術を伝え続けました。

苧麻糸は反物に織り上がると強い生地になりますが、糸の段階では乾燥に弱く、繊細な扱いを必要とします。雪に閉ざされた湿度の高い雪国の冬は、麻織物の製作に適しております。麻は吸湿性、速乾性、通気性に優れ、高温多湿の日本の夏に適した素材です。麻を材料として、丹誠込めて織り上げた織物は、薄く軽く肌触りがさらりと心地良く、清涼感溢れる夏着物に仕上がります。重要無形文化財「小千谷縮・越後上布」の着物としての魅力は、風や光を包括する自然な美しさと軽やかです。眺めているだけで、雪の清涼感や繊細な儚さが伝わってきますし、袖を通せば尚のこと、着心地はどこまでも軽く、体の隅々まで風が通り抜けていくようです。同じく重要無形文化財に指定されている沖縄宮古島の「宮古上布」と並び、夏着物の最高峰と称されております。

本展では、麻織物の軽やかさ、清涼感を感じて頂けるような演出の展示を行い、美しさを体感して頂きます。また、実演をまじえて工程の説明や歴史背景などを多角的に紹介します。文化庁の協力のもと、世界が認めた「小千谷縮・越後上布」の優れた名品を展示。150点に及ぶ作品数は、重要無形文化財の指定を記念して開催された1959年の展覧会以来初の試みとなります。

蘇芳染　飛鶴群調模様　帷子

豊かで厳しい雪国の自然と風土と人々の深い関わりの中で育まれ、先人たちが英知の結集と弛まぬ努力によって築き上げてきた「小千谷縮・越後上布」。その繊細な美しさとともに、支え、伝えようとする人々の慈しみの思いを表現したいと思っております。

（「小千谷縮・越後上布」展実行委員会事務局長　西脇 聖）

ユネスコ無形文化遺産登録記念
重要無形文化財「小千谷縮・越後上布」展

■会　期／2010年6月12日(土)～6月27日(日)　会期中無休
■開館時間／9:00－17:00
※観覧券の販売は閉館30分前まで
■観覧料／前売り・当日　一般500円
大学・高校生300円
※中学生以下無料
※障がい者手帳をお持ちの方は無料（受付でご提示ください）

所蔵品紹介

平成21年度の新収蔵品

本年度の新収蔵品は全て寄贈によるもので、収蔵作品数は7件でした。日本画では新潟市（旧豊栄市）に生まれた斎藤満栄の再興第93回院展出品作の《橋（カレル）》があります。斎藤満栄は2006年に新潟県出身者としては小林古径、小島丹漾、大矢紀に続く4人目の日本美術院同人となりました。なかでも本作はチェコのプラハにあるヨーロッパ最古の石橋、カレル橋を描いたもので、川にかかる霧の風景が幻想美を帯びて表現されており、作者の代表作の一つとして位置づけることができる作品です。洋画では河内文夫の《アストリアスへの旅から》、《エル・カミーノ》の2点がご遺族より寄贈されました。それぞれ第28回日展特選、第93回光風会展文部科学大臣賞を受賞した作品であり、ロマネスク・ゴシック時代の聖堂をモチーフにした作者後期の特徴が現れた代表作です。

洋画というより「平面」の分野に属する作品として、ヨシダミノルの《Just Curve for Blue》があります。作者は1960年代に具体美術協会に所属し、動きながら音を発する作品を制作したり、1970年以降は渡米しパフォーマンス作家として知られていますが、本作では作者の造形に対する基本的な思考を見ることができる貴重な作品です。また、本作は第3回長岡現代美術館賞展の出品作でもあり、当館に駒形十吉記念美術館よりご寄託頂いている作品と併せて紹介することで、長岡現代美術館の先駆的な試みがより浮き彫りとなるでしょう。

松永真は日本を代表するデザイナーの1人です。当館でも平成16年度、平成19年度併せて115点の作品を既にご寄贈頂いていますが、本年は記憶にも新しい《G8北海道洞爺湖サミット開催記念ポスター》と《ショーモン国際ポスター・グラフィック・デザインフェスティバル20周年記念ポスター》の2点を新たにご寄贈頂きました。

デザインでは本年も亀倉雄策賞受賞者の受賞作をご寄贈頂きました。第11回目にあたる今回は北海道札幌市に生まれ、「パナソニック電工」グラフィック・デザインや「ラフォーレ原宿」広告で知られる植原亮輔氏が受賞し、その受賞作「THEATRE PRODUCTS」のグラフィックツール一式をご寄贈頂きました。ポスターやハガキ、案内状など様々な分野に広がるデザインの一端を眺めることができる貴重なデザイン群であると言えるでしょう。

多方面に渡る新収蔵品は当館の展示の幅をさらに拡げてくれるようです。

ヨシダミノル《Just Curve for Blue》
1966年

斎藤満栄《橋（カレル）》2008年

植原亮輔「シアタープロダクツのグラフィック・ツール」
2006－09年

平成21年度　新収蔵作品一覧

◎新潟の美術

分野	作家名（生歿年）	作品名	制作年	寸法（cm）	素材・技法・形状
日本画	斎藤満栄	橋（カレル）	2008年	175×220	紙本彩色
油彩画他	河内文夫	アストリアスへの旅から	1996年	162.1×130.3	カンヴァス・油彩
		エル・カミーノ	2007年	194.0×162.0	カンヴァス・油彩

◎日本の美術

分野	作家名（生歿年）	作品名	制作年	寸法（cm）	素材・技法・形状
油彩画他	ヨシダミノル	Just Curve for Blue	1966	260×183×195	カンヴァス（変形）・油彩
デザイン	松永真	G8 北海道洞爺湖サミット 開催記念ポスター	2008年	145.6×103.0	紙・デジタルプリント
		ショーモン国際ポスター・グラフィックデザインフェスティバル　20周年記念ポスター	2009年	145.6×97.1	紙・デジタルプリント
	植原亮輔	シアタープロダクツのグラフィック・ツール 37点	2006－2009年	53×76　他	紙・インク

あしあと
教育普及活動報告

キーワードは「出会い、楽しみ、学びにつながる美術館」

平成21年度の教育普及活動では、「出会い、楽しみ、学びにつながる美術館」をキーワードに取り組んできました。美術館で本物に出会い、体験し、来館される方々に感動を与えられるように、活動の見直しと改善を図りました。気軽に美術館へ足を運んでもらえるようにするとともに、地域との連携や人とのつながりを大切にしています。

これまでの美術鑑賞講座、作品解説会、ワークショップ、映画鑑賞会等に加えて、新たに「出前講座」を設けました。これは、美術館や作品鑑賞等にかかわる理解を深めるため、市町村、公民館、町内会、PTA、園・学校等が主催する講座に、当館学芸員等を講師として派遣し、美術鑑賞講座やワークショップを行うものです。

出前講座での共同制作＜手まりの里カーニバル～WAになって踊ろう!～＞
（新潟県立高等養護学校手まりの里分校1・2年生）

昨年度、美術鑑賞講座4件、ワークショップ9件の依頼があり、合計535人の参加者を得ました。児童館での小さなこどもから高齢者大学でのお年寄りまで、幅広い年齢層に渡って楽しんでいただきました。美術館がもつ資源が地域から家庭へと伝わり、そして美術館に興味をもっていただいた方から、また足を運んでもらうサイクルが生まれつつあります。

館内でのワークショップは、展覧会に関連する内容もいくつか取り入れました。企画展「ネオテニー・ジャパン高橋コレクション」では、出品作家を講師に招いて創作活動をしました。

一つは、秋山さやかさんによるワークショップ「長岡をつづる」。長岡の街を散策して集めた「気になるモノ」を使って、思い出を「手紙」のかたちで表現するものです。もう一つは、丸山直文さんによるワークショップ。彼の作品の特徴である「ステイニング技法」を使い、自分で題材を決めてアクリル絵の具で表すものです。どちらも、参加者は初めて接する表現方法に興味をもち、講師の人柄にも触れながら、楽しく表現することができました。自分の作品への愛着とともに、作家の作品への関心が高まりました。

夏休みには、2回目となる「こどもアートミュージアム」を開催しました。こどもを中心とした「みる楽しみ、ふれる楽しみ」をテー

丸山直文さんによるワークショップ

マに「見方・考え方」を広げた児童・生徒の表現作品の展示等を行い、作品を通したコミュニケーションの輪を広げ、気軽に表現や鑑賞に親しみ楽しむことがねらいです。

参加10団体による作品11題材213点、ワークショップ7題材がありました。こどもの個性を引き出す独創的な題材が多く、一人一人のよさが伝わってきました。ワークショップでは、家族で会話しながら楽しむ姿が見られました。

こどもアートミュージアム会場風景

今年度も、出前講座やこどもアートミュージアムなどの教育普及活動を継続していきます。来館者や地域のニーズに応えるためにより内容を充実させ、感動を与えられるよう努めてまいります。

（元 当館学芸課長代理・現 前浜小学校長　立川厚生）

アートボランティア通信

アートボランティア組織が発足し、2年が経ちました。平成21年度は、アートボランティアの皆さんからは、本当に多くのお仕事をしていただき、今では美術館運営になくてはならない存在になりました。

ポスター・チラシの発送作業、ワークショップのサポート、書庫の整理、6月に実施したキャンドルナイトの企画・運営等、多方面にわたって意欲的に取り組んでいただきました。

その中でも21年度で特筆すべきは、亀倉雄策関連資料の整理です。亀倉雄策（1915～1997）は新潟県燕市（旧吉田町）出身の戦後日本を代表するグラフィックデザイナーで、1978年には日本グラフィックデザイナー協会（JAGDA）創立に参画し、会長となりました。代表作としては、東京オリンピック公式ポスター、日本万国博覧会（大阪万博）公式ポスターなどがあげられます。

亀倉雄策が所有していた膨大な関連資料は、1997年、2001年、2007年の3回に分けてご遺族・亀倉雄策資料室から当館に寄贈されました。その中で1997年分は整理が終わり作品登録も済みましたが、2001年と2007年分については段ボール箱等で174箱もある膨大な量で、現在でも十分に整理されていないまま今日に至っています。この174箱の関連資料に資料名をつけ、採寸し、写真を撮る作業をアートボランティアの皆さんから継続的に行っていただきました。

現在全体の3分の1ほどが終了しました。資料整理が完了しましたらデータベースに入力し、展覧会での展示や亀倉雄策に関する研究に役立てていく予定です。

亀倉雄策の「資料室」について　大石恒太郎

年季の入った箱や書籍、ファイルなどの山、山。「資料庫」や「資料室」という言葉を聞いたり、著名な作家の仕事部屋や書庫を紹介する記事や映像を目にすると心が躍るのは自分だけだろうか。千差万別のモノを生み出す、その根源たる場所を覗く。そんな行為は、悪趣味と言われても、仕方がないのかもしれない。

自分は現在、週に一度、アートボランティアとして、正に先述した「資料室」のような一室で、燕市出身の作家、亀倉雄策が残した茫洋たる作品群の整理に携わっている。作品の形態は様々で、雑誌の表紙、葉書、原画、写真、チラシなどが散見される。何と呼称すべきか分からないものも多い。そのようなファン垂涎の雑多な作品に触れつつ、寸法を測り、ナンバリングし、写真に収めるといった作業をしている。いわば、亀倉作品の鑑賞（展覧会などのイヴェント時における「鑑賞」という行為とは異なるが）と保存を同時に体験しているのである。

このように、亀倉の「英知」がぎっしりと詰まり（中には、試行錯誤の痕跡が見受けられる原画も!）、独特の「匂い」を放つ作品群と一対一で向き合えることは、亀倉の名前さえ知らなかった自分にとっても、至福の時である。何故ならば、作品自体を見ることに勝る芸術の鑑賞法は無いからだ。保存と鑑賞。これら二つの行為の内実は、至って単純に思われるが、その難しさと奥深さの追求に終わりはない。だからこそ、自分はいつの日にか大勢の人々に感銘を与えるであろう、亀倉作品の整理を、今後も綿々と続けていきたいと思う。

資料名をつけ、採寸をします

ただいま奮闘中　金子かおる

壁一面に並ぶ白い段ボール箱。亀倉雄策氏の足跡をギュウギュウに詰め込んだ資料群である。完成した作品から、何かの指示の書き込みのある紙片から、雑誌に掲載されたほんの一文から、様々な資料が入っている。その一つ一つをナンバリングしサイズを測り、ファイルに整理していく作業の真っ最中である。

箱を開ける度に驚きの連続。よく見知ったマークや広告、何十年も前の作品のデッサン面。斬新なデザインや品の良い色彩の組み合わせ等、手を止めて見入ってしまう。また、雑誌の他のページには戦争中らしく、ドイツ兵を称える写真や文があったり、女性誌の人生相談の昔も今も変わらぬ悩み事があったりして、関係のない所までつい読んでしまったりも。

亀倉氏は大御所になってもコンテストに出品し、「ちゃんと他の皆と同じように審査してくれ。」と言い、仲間の審査員を困らせていたというエピソードを、昔お仲間だった方から伺った。常に前向きで意欲あふれる方だったのだろうな、と思った。いくつになっても新鮮な気持ちで挑戦するかっこいい亀倉雄策の生き方を、見習っていきたい。

世界的にも活躍された偉大な人物なのに、この一年間作業をしてきて、少し近しく感じられるようになった。次から次へと出てくる亀倉氏の多様な仕事ぶり。この箱からはどんな亀倉氏が現れるのかと、ワクワクしながらまた新しい箱に向かう。

1枚ずつ写真を撮っていきます

MUSEUM INFORMATION

イベント情報〈4月～10月〉

▶企画展

4/10(土)～5/30(日)　日本の自画像 写真が描く戦後 1945-1964
7/10(土)～8/25(水)　モーリス・ユトリロ展
9/11(土)～11/23(火・祝)　ポンペイ展 世界遺産－古代ローマ文明の奇跡

▶常設展

6/3(木)～7/4(日)　小野末/竹谷富士雄/三芳悌吉の世界
7/8(木)～9/5(日)　村山径と《戦後派》の日本画家たち
9/10(金)～11/28(日)　亀倉雄策の世界

▶共催展

6/12(土)～6/27(日)　小千谷縮・越後上布展
6/30(水)～7/4(日)　県展「長岡展」

▶ワークショップ　(参加無料/エントランス集合/午後2時～)

《びじゅつ☆体験隊》
7/11(日)　大人のぬり絵－ユトリロが描いた街並み
8/22(日)　楽しく描こう石ころアート
9/26(日)　親子で楽しむ版あそび
10/3(日)　親子で楽しむポンペイの剣闘士紙相撲

《発見!びじゅつかん》
5/2(日)　美術館の舞台裏探検
7/18(日)　ギャラリートーク　美術でおしゃべり①　※午前11時～
7/25(日)　ユトリロが描いたモンマルトルを探る
8/15(日)　ギャラリートーク　美術でおしゃべり②　※午前11時～

▶美術鑑賞講座　(聴講無料/講堂/午後2時～)

5月1日(土)　「戦後日本を写した写真家たち」
5月29日(土)　「近代日本美術史入門1　近代の工芸」
6月12日(土)　「郷土の作家シリーズ1　小野末/竹谷富士雄/三芳悌吉」
6月26日(土)　「近代日本美術史入門2　昭和期の日本画」
7月3日(土)　「近代日本美術史入門3　戦後美術」
7月31日(土)　「ユトリロの生涯とパリ」
8月14日(土)　「ユトリロの時代～エコール・ド・パリの芸術家たち～」
10月23日(土)　「ポンペイ壁画とヘレニズム・ローマ時代の絵画」

万代島美術館情報

◇ジャポニスムとナビ派の版画
4月17日(土)～5月23日(日)

◇ピーターラビット®の生みの親
ビアトリクス・ポター™展
6月4日(金)～7月11日(日)

◇彫刻家・藪内佐斗司展
動き出す彫刻たち
7月24日(土)～9月26日(日)

◇物語の絵画
10月9日(土)～11月28日(日)

◇岩合光昭写真展「ねこ」
12月11日(土)～2月20日(日)

◇画家のまなざし
スケッチ、構想、そして作品
3月5日(土)～3月31日(木)

〈カリフラワーと手紙を持つピーター〉
制作年不詳
フレデリック・ウォーン社蔵
Reproduced by permission of Frederick Warne & Co.

The Niigata **Bandaijima** Art Museum
新潟県立万代島美術館
〒950-0078　新潟市中央区万代島5-1
(朱鷺メッセ内　万代島ビル5F)
TEL025-290-6655　FAX025-249-7577
http://www.lalanet.gr.jp/banbi/

ミュージアムショップ KINBI より
〈おすすめ商品のご案内〉

○十日町染色工房きはだや
古布しおり　¥800
草木染マフラー
¥3,990

■ **ミュージアムショップ　KINBI**　TEL0258-28-2200

レストラン 広告塔 より
〈人気メニューのご案内〉

展覧会にちなんだお食事、平城遷都1300年祭を記念し紅白丼、抹茶ご膳などバラエティーなメニューでお待ちしております。お気軽にご利用下さいませ。

4月24日(土)より、抹茶セットに水晶餅が付きます。コンニャクの入った餅の中にはサッパリ抹茶餡、ヘルシーさと独特の食感をお楽しみください。

抹茶セット　¥650

みつ豆　¥520

■ **レストラン　広告塔**　TEL0258-29-5001

表紙作品解説

❶**舟越直木《夏の夜》** 1997年
❷**岡本敦生《地殻―海》** 1995年

このところの『雪椿通信』では、当館の周辺に設置されている野外彫刻を紹介しています。《夏の夜》の樹木のような、あるいは籠のような形態は、作者がそれまで繰り返し制作してきたこだわりのある形の新たな一変種です。周囲の空間に対して開放されつつも、内部を包み込んだ作品全体の空間こそがこの作品の魅力ですし、遠くから眺めるだけでなく、中にそっと入り込んで身体全体の感覚で空間や大きさや雰囲気を感じ取ることもできます。《地殻―海》は、何かの生命体を思わせる有機的な形態が、巨大な石塊の外郭から這い出たようにも、あるいはそこへ帰るようにも見えます。これら二つの部分は、元々一体の石塊に由来し、有機的形態は外郭の内部をくりぬいて取り出された石塊を分割し再び組み合わされています。作者は、「地殻岩盤の奥深くに石となって堆積していった生命の記憶と私の遺伝子の深層部に蓄積されているはずの生き物としての歴史を探る作業を続けている」と語ります。

新潟県立近代美術館だより　雪椿通信　第34号

編集・発行　THE NIIGATA PREFECTURAL MUSEUM OF MODERN ART
新潟県立近代美術館
〒940-2083　新潟県長岡市千秋3丁目278-14
TEL0258-28-4111(代)　FAX0258-28-4115
http://www.lalanet.gr.jp/kinbi/　e-mail kinbi@coral.ocn.ne.jp

制作・印刷　三条印刷株式会社
〒955-0072　新潟県三条市元町9番3号　TEL0256-32-2281(代)

発 行 日　2010年4月30日